HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中世ドイツのいくさ物語
Author(s)	寺田, 龍男
Relation	北海道大学平成遠友夜学校. 2014年11月25日. 北海道大学遠友学舎.
Issue Date	2014-11-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57446
Type	lecture
File Information	20141125terada.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

中世ドイツのいくさ物語

2014 年 11 月 25 日　於・北海道大学平成遠友夜学校

寺田龍男（北海道大学）
tterada@imc.hokudai.ac.jp

１.「中世ドイツのいくさ物語」とは何か

①内容：勇壮無比の男たちが戦う（そして最後は倒れる）

→　こうした「英雄についての語り」は、戦いがあるたびに生まれていた
（「剣を取る者は皆、剣で滅びる」『マタイ伝』26,52）

→　「合戦は、それが武力衝突にいたるまでの原因と経過があり、劇的な合戦と戦いが終わったのちに、勝者と敗者のたどる運命（は)、広く人々の関心をひく」（大隅 10 頁）

②ヨーロッパの「中世」は、歴史学ではほぼ西暦 500 年頃から 1500 年頃まで

→　479 年に西ローマ帝国が滅亡、16 世紀はじめに宗教改革

→　西ローマ帝国を滅ぼしたのは「ゲルマン人傭兵隊長オドアケル」。その支配を倒したテオドリックがドイツ語圏における英雄伝説の中心的存在

③「ドイツ」はドイツ語圏で、今日のドイツ・オーストリア・スイスおよび周辺地域

④作品としては『ニーベルンゲンの歌』がもっともよく知られている

→　口承文芸（ジーフリト伝説・ブリュンヒルト伝説・ブルグント伝説）をもとに書かれたと推定される
しかし作品成立のきっかけは「外来」文学

２．そもそも「物語」にはどのような意味があったか

①当時はテレビもラジオも映画も小説（紙媒体）も何もない時代。娯楽といえば、まず古老の語る昔話、歌、大道芸人の語りや曲芸・音楽など

→　当時は「老い」と「賢い」が同じ意味で用いられていた
主人公はほとんど英雄（すなわち腕っぷしの強い男）と絶世の美女

→　「賢い」と「老い」が同義の時代なので、「頭の良さ」はあまり話題にならない。主人公ははじめからあらゆる点で抜きんでている

②いわゆる「ふつうの人」はほとんど登場しない。

→　貴族社会で成立したのであれば理解できるが、民衆レベルの語りでも貴族が主人公だったか？

→　ドイツ語圏ではそのような物語があったかどうかわからない

③理屈で説明のつかないことは「不思議」と定義された。また「夢」は現世と彼岸をつなぐ回路ととらえられていた（→　夢の解釈）

３．人前で話をする機会はさまざま

「聞き手を退屈させない工夫」が求められたのは東西に共通

→　例：宗教者の説教「神の教えを語ってもみな退屈しているが、英雄の名前を挙げた途端…」（M ルター）「教えを効果的に伝えるためなら事実に脚色してもよい」（13 世紀の僧無住）

４．「中世ドイツのいくさ物語」の特徴

①「力の強いものは他人のものをも略奪する権利があるという武力賛美」（相良訳・後編 350 頁）

②「たとえ死ぬ運命とわかっていても名誉を守るためには戦いぬく」という悲劇的運命観

→　「死ぬかもしれない」というリスクが逆に勇猛心を駆り立てる

→　第二次世界大戦当時さかんに宣伝された。『ニーベルンゲンの歌』は当時国民の必読書とされた。またヒトラーらを作品の登場人物になぞらえるプロパガンダも行われた。

③口頭伝承の担い手はわかっていない。古くは話芸を披露する「吟遊詩人」が語り伝えたと考えられていた。宮廷の貴族のあいだでも口頭伝承が行われていたか？

→　どちらにもたしかな証拠はない。しかし、身分がそれなりに高くかつ教養があった人々でも、口承文芸の担い手だった可能性はある。

→　日本では『将門記』に「衆口」（一般の人々の語り）にもよる、という記述がある。また琵琶法師の語りは社会の上層から下層まで広く享受されていた。（女性の語り芸能者は瞽女）

５．日本の「いくさ物語」は？

①「いくさ物語」は本来日本文学で用いられる用語

全体の中で戦争や戦闘が大きな意味を持つ物語。日本では『古事記』『日本書紀』から軍記物語（『将門記』『陸奥話記』『保元物語』『平治物語』『平家物語』『承久記』『太平記』など）、その後のさまざまな芸能まで包括する広い概念

②ヨーロッパでは、通常 Heroic Poetry, Heldendichtung（「英雄叙事詩」「英雄詩」と訳されるが寺田は「英雄文芸」を提案）が用いられる（『ニーベルンゲンの歌』『ベーオウルフ』『ローランの歌』など）

→　『ニーベルンゲンの歌』は 13 世紀初頭の詩人による創作の可能性が高い。つまり口頭伝承をもとにしてはいても作者の独創性が高い作品。（例：女性主人公の紹介で始まる―ふつうは男！）

→　「独創性」が高いということは、口頭伝承にそのまま依拠したのではない、ということ。

冒頭には（あとから付け加えられた？）以下の詩節がある：

> 私たちには古い物語で不思議なことが数多く伝えられています
> ―　誉れある勇士たちについて、大いなる戦いの苦難について、
> 喜ばしいことや宴の数々について、涙が流れたことや嘆き悲しんだことについて、
> 猛き勇士たちの戦いについて　―　これからみなさまに不思議な話をお聞かせしましょう
> （『ニーベルンゲンの歌』第 1 詩節<私訳>）

→　同様に全体を俯瞰する導入が『平家物語』にも：「祇園精舎の鐘の声…」

→　日本の軍記物語と西洋の英雄叙事詩は同列か？

戦う男たちの「武勇と不屈の魂を称揚する」点では共通。しかし西洋の研究者はまったく別ものと見る：日本の物語は具体的な史実にもとづき、年代・場所・人名がかなりリアル

↔　ヨーロッパの叙事詩では、多くの場合年代は不詳で人物も存在が証明できない

↔　寺田はそれでも、両者を包括する概念を模索中…

6．<u>『ニーベルンゲンの歌』のあらすじ</u>

ライン河畔ブルグント国のウォルムスに王女クリエムヒルトがいた（もちろん絶世の美女)。王女には三人の兄弟（グンテル・ゲールノート・ギーゼルヘル）がおり、長兄グンテルが王として統治していた（もちろん優れた勇士)。一方ライン河を下ったクサンテンの王子で無敵の英雄ジーフリト（ジークフリート）はこの王女を力づくで嫁に取ろうと考え、わずかな従者とともにブルグント国に乗り込む。

→　「力の強いものは他人のものをも略奪する権利があるという武力賛美」（相良）

しかし王たちは家臣ハゲネの知恵を頼りに、妹とジーフリトに合わせる機会をずるずると引き延ばす。

→　血気盛んなジーフリトをなだめ、ずるずる引き伸ばすことにどうやって成功したかが具体的に書かれていない。今も研究の空白

そしてグンテルもアイスランドの女王ブリュンヒルトに求婚し、ジーフリトに加勢を求める。この嫁取りに成功したら妹のクリエムヒルトを与える、と約束。そしてはるか遠いアイスランドに船で向かう。そして女王ブリュンヒルトの示した三条件（石投げ・槍投げ・立ち幅跳び）にグンテルが勝って、目出度く婚姻成立。しかし実は魔法で身を隠したジーフリトが代わりに石や槍を投げ、グンテルの跳躍をも助けていた。

→　つまりブリュンヒルトは騙されていた。それがのちの破滅の伏線となる

二組の結婚が成立する。しかしジーフリトはグンテルの家臣、と紹介していたため、ブリュンヒルトは王である自分の夫の妹が家臣と結婚することは身分違いとして不満。

→　ここもグンテルがブリュンヒルトをどう納得させたかが明示されていない

グンテルは結婚初夜、ブリュンヒルトの強い抵抗にあって思いを遂げられない。それどころか逆に手足を縛られて壁にぶら下げられてしまう。そのため二日目の夜またもジーフリトの助けを借りてようやく思いを遂げる。

→　ここでもブリュンヒルトは騙される。破滅へのさらなる呼び水

しばらく後、ブリュンヒルトはジーフリト・クリエムヒルト夫妻をウォルムスに招かせる。そこでクリエムヒルトに辱めを受けたブリュンヒルトはジーフリトを殺そうとたくらみ、忠臣ハゲネも国王と后の威信のため協力し、ジーフリトを騙して暗殺する。その巨大な財宝をハゲネはライン河に沈める。夫も財も失ったクリエムヒルトは寡婦としてウォルムスに残り 13 年を過ごす。

→　美男美女がどんなに愛し合っていているように描写されても、現実の婚姻は徹頭徹尾政略結婚。息子がクサンテンにいるにもかかわらず、夫を失ったクリエムヒルトはウォルムスに留まる。力任せに嫁取りをしようとした冒頭とは対照的にリアルな描写。

その頃、妻を失ったフン族の王エッツェル（＝アッチラ）は、家臣の勧めでクリエムヒルトを嫁に迎える使者を送る。エッツェルの力（巨大な富と武力）を得れば夫ジーフリトを殺された復讐ができるとクリエムヒルトは承服する。これを予知したハゲネだけが反対する。しかしブルグント一族はクリ

エムヒルトを送り出す。

その 13 年後、クリエムヒルトはブルグント一族をエッツェルの宮廷に招かせる。（エッツェルとクリエムヒルトの間には息子が生まれていた。）ハゲネは反対するが、グンテル王は応じる。旅の途中水の精の予言で、ハゲネは自分たちが誰一人故国に戻れないことを悟る。怖じ気づいた者が逃げられないよう河の渡し舟をすべて叩き壊す。

→ 「たとえ死ぬ運命とわかっていても名誉を守るためには戦いぬく」という悲劇的運命観は、それなりに人を感動させる。しかし第二次世界大戦当時さかんに宣伝された。

『ニーベルンゲンの歌』は当時国民の必読書とされた。またヒトラーらを作品の登場人物になぞらえるプロパガンダも行われた。

クリエムヒルトは一行の到着前からさかんに両陣営を煽り、険悪なムードを作り上げる。果たして戦いとなり、ブルグント勢いは全滅し、フン族側も名だたる勇士のほとんどが討たれる。兄グンテルとハゲネの首を斬ったクリエムヒルトはもはや悪魔でしかないと、老勇士ヒルデブラントに殺される。あとは生き残った人たちが悲しむばかりだった。

（参考文献）

『ニーベルンゲンの歌』相良守峯（訳）前篇・後篇　岩波書店 1975 年（岩波文庫）
『ニーベルンゲンの歌』石川栄作（訳）前篇・後篇　筑摩書房 2011 年（ちくま文庫）
『王女クードルーン』古賀允洋（訳）講談社 1996 年（講談社学術文庫）
『ヴァルターの歌』丑田弘忍（訳）朝日出版社 1999 年
日下力『いくさ物語の世界―中世軍記文学を読む』岩波書店 2008 年（岩波新書）
兵藤裕己『琵琶法師―<異界>を語る人々』岩波書店 2009 年（岩波新書）
大隅和雄『中世　歴史と文学のあいだ』吉川弘文館 2011 年
大津雄一『『平家物語の再誕』―創られた国民叙事詩』NHK 出版 2013 年（NHK ブックス）
ジェラルド・グローマー『瞽女うた』岩波書店 2014 年（岩波新書）
この他、井出万秀先生（立教大学）の講義録「ドイツの中世文化」が以下のサイトで公開されています。中世ドイツ文学の各分野が紹介されているほか、図像も多数収録されておりとても参考になります。
http://cl.rikkyo.ac.jp/arts/2009/dll118/

（付記）この発表は、JSPS 科研費 23520358 による研究成果の一部を、市民のみなさまに公開することを目的としたものです。当日は多くの方々が熱心にお聞きくださいました。またさまざまなご質問やご意見も頂戴し、私の研究テーマについてあらためて考え直すきっかけをいくつも与えていただきました。北海道大学平成遠友夜学校校長の藤田正一先生と教頭の江川美奈子さんをはじめ、すべてのみなさまに心からお礼を申し上げます。なお HUSCAP 掲載にあたり最小限の補正を施しました。